

師が作成したプリントが配布され、要約文を書く前にその構成を考えるよう指示されている。図1をご覧ください。

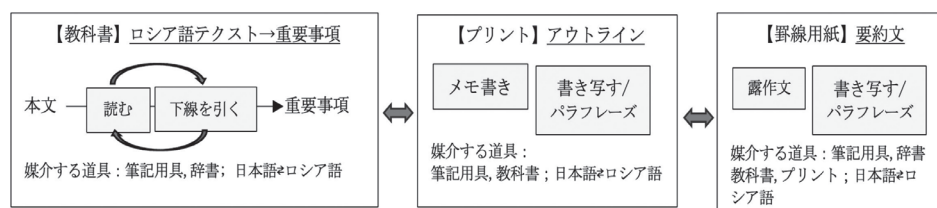


図1 個人ワーク：ロシア語テキスト→アウトライン→要約文(2019年11月20日)

まず、教科書のロシア語テキストを読み、要点を特定して抽出する。この行為には「理解する」という要素が含まれており、電子辞書を開き単語を打ち込んで語意を調べる、調べた単語の意味を、筆記用具を用いて教科書のテキストの行間に書き込むといった動作を伴う。次に、学習者が重要と判断した箇所に、筆記用具で下線を引く。続いて下線部を参照しながら、要約文のアウトラインをプリントの枠内に筆記用具で書き入れる。このメモ書きには日露両言語が使われており、要約内容が箇条書きで記される。また、ロシア語の表現も教科書から直接書き写される。最後に罫線用紙にロシア語で要約文を書く。その際、辞書を引いたり、教科書からロシア語表現を書き写したりするといった動作が伴う。このように、活動中は教科書、プリント、罫線用紙の媒介が筆記用具と共に頻繁に見られた。特に、教科書、プリント、罫線用紙各々に書かれたテキストが頻繁に往来する時には電子辞書も媒介することが多く、結果として、活発な日露両言語の往来/媒介が観察された。

一方で、プリントを用いずに要約文を書く学生もいた。その場合、「書く」行為は教科書と罫線用紙間の往来に限られ、ロシア語テキストに「下線を引き」その箇所を罫線用紙に直接「書き写す」という動作に終始し、要約文を書く段階での日本語の媒介は殆ど観察されなかった。このように、MDAによって、ロシア語で要約文を「書く」行為には、ロシア語テキストを「書き写す」あるいは「作成する」といった異なる動作が異なる認知能力を要求するため、学習効果に違いを生む可能性があることを明らかにすることができる。

従来、社会文化理論は人間の認知過程における心理的道具の役割に重点を置いてきたが、昨今の技術革新等により、技術的道具の媒介が人間の認知自体に変容をもたらしている。今後、テクノロジーの活用を踏まえた効果的なライティング指導を提案するために、心理面・物質面両面で二重に媒介される「書く」活動の学習過程を精査する必要があるだろう。

引用文献

- Horii, S.Y. (2022). Material mediation in L2 writing activities in a college Russian FL classroom in Japan. In D. LaScotte, Corinne S. Mathieu, and Samuel S. David (Eds.), *New Perspectives on Material Mediation in Language Learner Pedagogy* (pp. 171-187). Springer.
https://doi.org/10.1007/978-3-030-98116-7_10
- Scollon, R. (2001). *Mediated discourse: The nexus of practice*. Routledge.

横井 幸子 (大阪大学)